29Tl-am04

病院環境における浮遊真菌の実態調査

○柴田　高洋[1], 柴田　洋文[2], 伏谷　秀治[3], 渡邉　美穂[1], 東　満美[2], 庄野　文章[4], 水口　和生[2,3]（[1]徳島大 薬科学教育部, [2]徳島大 HBS研究部, [3]徳島大病院薬, [4]徳島文理大薬）

【目的】近年，臓器移植や化学療法を受けたコンプロマイズドホストに対する真菌症の増加が指摘されている．真菌は，環境中や生体内に存在し，常に空気中を浮遊しているので，感染経路の遮断は困難である．したがって，病院内環境における真菌の動向を把握することは院内感染対策の上からも非常に重要である．しかし，細菌に比べ，真菌を対象とした環境調査の報告は少ない．そこで，病院内の浮遊真菌の実態を把握するため，大学病院において浮遊真菌調査を行った．

【方法】採取機器には，Merck Air Sampler (MAS100)を用い，培地には Chloramphenicol (50μg/mL)を添加した Sabouraud Dextrose Agar を用いた．採取場所は，各病棟のデイルーム，病室，廊下を対象とした．形成されたコロニーについて，顕微鏡観察による形態学的同定を行い，*Aspergillus*, *Penicillium*を区別して表記した．

【結果・考察】A 病棟の二つの階は似た変動を示した．B 病棟は A 病棟に比べ浮遊真菌数は少なく，大きな変動はみられなかった．B 病棟は A 病棟と異なり最近開設された病棟であり，建物が新しいことから，この結果は築年数と密接に関わっていると推察している．現在，2009 年 9 月に完成した新棟について，病棟稼働前から浮遊真菌の調査を行っている．また，環境由来真菌の抗菌薬感受性試験についても検討しているので，これらの結果についても併せて報告する．